

<前回> 「宗教と科学」関係史 1—聖書から古代—

- ・「科学技術の神学」のキリスト教思想における基盤を求めて、関係史を振り返る。
- ・聖書から古代キリスト教：創造思想と知恵思想の意義と展開

8-1：聖書の創造論

- ・宇宙論的タイプの宗教→宇宙の存在という文脈における議論→始まり問題。
古代オリエントの宗教文化の共通性

cf. ギリシア哲学、仏教

1. 第1創造物語：人間の固有性・独自性

定型句：「神はAあれと言われた。するとそのようになった。神はAを見て良しとされた」 → 創造の善性（有意味性）、創造（言葉・行為）→存在

2. 被造物としての世界→世界の善性＝合理性

法則・理性

3. 人間存在の意味：神の像（imago Dei） → 特殊な使命（支配？）

↓

自らに与えられた理性（合理性）によって世界の合理性を解明する人間
科学技術の可能的基盤

4. 第2創造物語：関係存在としての人間 → 知恵・耕す（科学技術）

可能性の現実化

8-2：創造から知恵思想へ**A 知恵思想と科学****(1) 成立の歴史的背景**

2. 創造や契約をめぐる諸思想を前提として、それを古代イスラエル民族が置かれた歴史的状況（王国形成・崩壊からバビロン捕囚、地中海・オリエント世界そしてヘレニズム世界の国際関係）において展開したものと位置付けられる。
3. 知恵文学の成立の場：フォン・ラートらの旧約聖書研究→宮廷知識人、とくにエジプトの書記学校に相当する官吏養成、学校の知識人

(1) 共同体の知恵（伝承）

(2) 対外的な国際関係が要求する国際的な知恵

4. 共同体の知恵：共同体の一員として習得すべき知恵（＝慣習的知恵）

(2) ヘブライ的知恵文学の思想的特徴

①創造の知恵、あるいは知恵による創造

世界に内在する法則性への信頼→神への信頼＝「神への畏れ」

知恵思想は創造論を前提とし、それを展開する内容をもっている。この点は、下に引用した箴言8章において、神が天地創造に先だって、最初に「知恵」を創造した。

②神の創造行為の探求と称賛としての科学 → 自然を通した神の讃美

→ 自然神学（書物としての自然）

③「知恵のある生活」

④因果応報とその限界

(3) 創造から知恵思想へ

6. 創造思想の発展+転換：罪を前提とした創造の秩序。
7. 創造の善性+罪＝知恵の両義性。 → 科学技術の原理的な両義性。原爆と原発。
→ 科学技術を使う側の人間の知恵が問われる。
8. 黙示終末的な宗教者イエスから、知恵の教師イエスへ。

B 終末思想と科学

8. 人間的努力の限界→神の世界への介入、超自然主義。未来の予測は科学？ モデル化とシミュレーションによって、人類は未来を支配できるか？
9. 両義性の現実への回答としての希望（終末）の約束。

8-3：知恵思想の展開と無からの創造

1. ヘレニズム世界への展開 → ヘレニズム文化との交渉・論争
論争の場としてのコスモロジー
プラトンの世界創世論（『ティマイオス』）
デミウルゴス、イデア界、素材、善

2. 神・創造の善性と神の絶対性の強調：救済の確実性
→ 神は何ものにも依存せずに世界を善なるものとして創造した
→ 神のみが世界を支配する

3. 「無からの創造」（*creatio ex nihilo*）の帰結
(1) 悪の問題のアポリア (2) 世界の合理的秩序とその理解可能性
cf. プラトン主義の二世界論、グノーシス主義、マニ教

↓

世界全体・現象世界を科学するということの動機付け

世界のすみずみまで合理的な法則が行き渡っている。この合理的な法則は人間の理性によって理解できる。両者は共に、神の被造物だから。

もし、反合理的な悪が世界を支配しているならば、世界を合理的に理解することはできない。

4. ロゴス・キリスト論、宇宙的キリスト

9. 「宗教と科学」関係史 2

— 適応の原理の射程 —

(1) 神の超越性と啓示

1. 超越的な神をいかにして知りうるか？
・ 啓示の道：神から人間へ
創造（自然から自然的理性によって。原啓示）と救済（救済啓示）
・ 啓示の具体化とロゴス（神の言葉）→ 神学的認識論と聖書論・聖書解釈学

2. キリストのケノーシス
神の言葉＝三位一体の第2位格

「キリストは、神の身分でありながら、神の等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」(フィリピ 2.6-9)

3. 神の人間の状況に対する適応。神-人としてのイエス、キリスト両性論。
神の下降と人間の上昇

(2) 古代教父における適応の原理

4. 武藤慎一『聖書解釈としての詩歌と修辞——シリア教父エフライムとギリシア教父クリュソストモス』
5. 「ニシビスのエフライムは古代最高の賛美歌作者で、四世紀の最も重要な名教会著作家の一人である。」「シリア教会を代表する人物」(77)
「対象としての神」「隠された」と「明かされた」という語は二つ一組で繰り返し使用

される。」

「隠されたこと」「探求不可能性」「創造者と被造物との間の隔絶」

「明かされたこと」「探求可能性」「神はその愛故に自らを人間に明かそうとした」「自分があるがままに啓示しなかった。人間が弱すぎて、それに耐えられなかったからである。そこで、人間の弱さに適応した姿を啓示した。これが像による適応である。また、人間の言葉でもって語った。」(85)

「「認識対象」からの働きかけなしに認識が成立不可能、ということ」(90)、「しかし、それでは神の側からの働きかけさえあれば、それだけでよいのだろうか。」今度は人間の側の自由意志が必要になる。「神の語りかけに人間が自らの意志でもって応答することで初めて相互関係が成立する。」

「この関係が結ばれる時、創造者と被造物との間にあった深淵が神の愛によって越えられる。ここには、人が「御自分のものたち」と呼ばれるほどの親密な関係がある。」(92)

「神と人間のどちらも「主体」であって「対象」ではない。」(93)

「「神の下降」は「神の適応」の問題に直接関係し、解釈学的にも重要である。」「「神の適応」において中心的な位置を占める「像」。「像」こそが「神の下降」と「人間の上昇」の双方に共通する要点」(95)

「神は創造に際して下降していた」「全被造物が神の「象徴」

「御父が像によって顕現した」「それは人間一人一人を尊重して、各々が自分の力に応じて把握できるようにするため」「旧約と新約の相違」(97)

「御父が人間の言葉で語った」

「ついに御子が受肉した」(98)

「人間もこうした神の下降によって初めて上昇した。また神の適応行為は全て、人間を上昇させるためだった。」

「人間の自由意志を最大働かせることができるようにするため」

「人間は上昇することによって初めて、神を語るができるようになる」(99)

「人はその時々自分にふさわしい象徴によって、その時々自分にふさわしい神理解をしていくべきである。つまり神の適応を正しく理解し、それに応じて聖書を読むのである。」(102)

「人間は言わば、神の象徴によってますます神の象徴に化していく、のである。」(103)

6. 「クリュソストモス」

「神理解の可能性と不可能性」

「神の下降」

「人間の上昇」

(3) 宗教改革

7. プロテスタントイズムとは何か

- ・原理としてのプロテスタントイズム (宗教史の構成要素)
- ・歴史的プロテスタント (教派・組織として)
- ・プロテスタント時代 (プロテスタント教会の存在によって構造が規定された時代)

8. 宗教改革 (ルター、ツヴィングリ、カルヴァンら) とその広がり

1517年10月31日、マルティン・ルターは、当時ザクセンで大々的に売り出されていた贖宥状(いわゆる免罪符)に対して、ヴィッテンベルク城教会の扉に「95箇条の提題」を貼りだし、贖宥についての学問的討論を提起した。それは、カトリック教会の破門決定にもかかわらず、最初の意図を越えてヨーロッパ各地に広がっていった(思いがけない波及効果)。

9. 宗教改革の思想内容（三大スローガン）

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり（例えば、聖餐論争）、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。

「信仰のみ」（信仰義認論）、「聖書のみ」、「万人司祭説」

大切なことは、これら三つのスローガンが、それぞれ内的に関連し合っている点であり、ばらばらに理解すべきではない。

10. 人間は何によって救われるのか？

- ・ 行為義認
- ・ 人は救いに十分なほどの善行を実行できるか、あるいは救いを実感できるのか。
贖宥の論理、罪や恩寵についての実体論物的理解
- ・ 「信仰のみ」＝信仰義認論（信じる心の純粋さという個人の人格性）
パウロに遡り、アウグスティヌスの思想系譜に立つものである。

cf. 法然や親鸞の思想と比較せよ。

11. 理念と現実の緊張

階層的秩序の存続。信仰の自己決定と聖書の情報公開に関連して。

12. 聖書の近代語への翻訳／印刷技術の普及と出版システムの確立／初等教育の普及（識字率）

13. 市民社会の宗教としてのプロテスタンティズム

「聖書のみ」の理念の実現のプロセスからわかるように、宗教改革の普及は、西欧世界の近代化プロセスと基本的に重なり合うものである。

聖書の近代語への翻訳 → 西欧国民文化の基礎

（4）カルヴァンの適応の原理、そしてガリレオ裁判

14. ガリレオ裁判を「宗教と科学との関係史」の観点から見る。

宗教と科学の対立図式は19世紀（1880年代）の産物である。ラッセル『西洋哲学史』

15. 最近のガリレオ研究（芦名定道『宗教学のエッセンス』北樹出版、176-177頁）によって、以上の単純な対立図式の事例としてのガリレオ事件という見方は大きく修正されてきている。

16. カルヴァン『創世記注解』における「適応の原理」（principle of accommodation）

「モーセは、常識ある普通人の誰しものが教えられなくても理解できるような事柄を平易な文体で記述した。しかし天文学者は、人間精神の賢明さが理解できる限りの事柄を苦勞して探求する。しかしながら、この研究は神に見捨てられるべきものではなく、また、この科学を、自分の知らない事柄は何でも勝手に退けようとする血迷った人々がいるという理由で非難すべきではない。なぜならば、天文学は、喜びを与えるだけでなく、その知識は有用だからである。この学問が神の驚くべき知恵を示すということは否定できない。……モーセは、学識ある人々のみならず、無学で無教養な人々をも教える教師として定められているのであるから、こういうきめの粗い教え方をするところまで身を低めなければその役割を果たすことができなかつたのである。」

(John Calvin, Commentaries on the First Book of Moses called Genesis (translated by the Rev. John King, M.A.) volume First, The Edinburgh Printing Company 1847, p.86)

17. では、どうしてガリレオ裁判は避けられなかつたのか。カトリック教会はなぜ天動説に固執したのか。→プロテスタント的新解釈に対して、伝統的解釈を防衛する。

18. ガリレオ裁判（1633年に第2回裁判の有罪判決）は、自然科学とキリスト教との対立の代表的事例として論じられることが多いのではないだろうか。しかし、現代人がイメ

ージするような科学と宗教の対立図式は、実は1880年代頃に成立したものであって、それをそれ以前の、たとえばガリレオ裁判に読み込むのはかなり無理がある。実際、近年のガリレオ研究によって、対立図式の典型例という見方は大きく修正されてしまった。では、ガリレオ裁判とは何であったのか、どうしてカトリック教会はガリレオに対して有罪判決を出すことになったのかが、改めて問題となる。

この問題を解く上で、確認すべきポイントは以下のものである。

- 1) これまでガリレオ裁判は、天動説という世界観的枠組みで行われてきた伝統的な聖書解釈に対してコペルニクスの地動説が反するのかどうかという問題と結びつけられた。しかし従来カトリック教会は、聖書に関して解釈の多様性を認める柔軟な態度をとることが可能だったのであり、コペルニクス説が天体の予測をより容易かつより正確にするために有用な数学的な仮説であると考えられる限り、その研究自体が禁止されたわけではない(1616年の第1回裁判はこの解釈の範囲にあったと考えられる)。
- 2) ガリレオは、コペルニクスやケプラー同様に、キリスト教信仰を自覚的に保持しており、教会の教えを否定するという意図も意識も認められない。
- 3) 第1回裁判と第2回裁判との間にガリレオを取り巻く教皇庁内の政治状況に変動があり、この間に証拠の捏造が行われた疑惑がある。ガリレオはこうした状況の変化にもかかわらず、裁判に対してあまりにも楽観的であった。
- 4) 創世記などの聖書解釈と地動説などの新科学の知見とが必ずしも対立しないと考えることができた点については、同時代のプロテスタント世界の事例、たとえば、カルヴァン『創世記注解』から明らかである。カルヴァンは伝統的な「適応の原理」(神が人間の知的状況に自らを適応させる)に基づいて、創世記の物語と天文学者の数学的見解との合致を承認することができた。

以上から総合的に判断すれば、ガリレオ裁判を「科学と宗教」対立の事例とする解釈には無理があることが明らかであろう。むしろポイントは、カトリック教会(天動説を含む伝統的な聖書解釈に依拠する)とプロテスタント教会(信仰義認論を始め聖書の新解釈に依拠する)がガリレオ裁判の時代的背景であったことにある——ガリレオ裁判は30年戦争とまさに同時期である——。聖書のプロテスタント的新解釈に対して、伝統的な聖書解釈を防衛するというカトリック教会が置かれた状況は、聖書の新解釈に道を開く地動説に対して寛容な態度をとることを困難にしたのではないだろうか。

(5) 啓蒙主義とハーマン

19. 川中子義勝『ハーマンの思想と生涯——十字架の愛言者[philologus crucis]』教文館。
20. 「その思想の深さと今日にまで及ぶ射程の大きさという点で、ハーマンは、カントに肩を並べる存在としてあげうる数少ない思想家の一人である。」「実存への注目、身体性と性の重視、言語と解釈の関係、世界の歴史性・言語性へ洞察などについて」(14)
「ハーマンの時代の宗教性、特にその敬虔の側面を規定している事柄」「そこには信仰の〈内面性〉の過程を見ることができる。敬虔主義の浸透は結果として信仰の力点を、神の絶対的な超越性から人間の〈内在〉の領域へと移行させた。それは時代の世俗化の推移に呼応し、否、これを自ら担いゆくものであった。」(51)

「神のへりくだり」

「ハーマンの回心、その実存の変革は、まさしく「言葉の出来事」、リクールの解釈学に則れば「テキストの前に生じた出来事」であった。」(67)

「「へりくだり」の概念そのものは、一八世紀において、〈適合の理論〉としてよく知られた理論であった。」「叙述の卑しさは、真理を無知蒙昧な民衆にも〈適合する〉ために、神が用いた、いわば非常手段なのだ」と説明される。そのような弁護は、古くは古代ギリシャ

に遡り、ホメーロスの神話の解釈に用いられたのが最初である。」

「回心を経てハーマンは「へりくだり」の意義を正反対に、きわめて積極的なものに転じた。「神のへりくだり」は決してそのような啓示の〈周辺〉ではない。それは、むしろ神の行為の〈第一原理〉をなす。ハーマンは、「神のへりくだり」を神より生じる全ての出来事のコアと見ている。神は、創造において、受肉において、また聖書の記述において「へりくだる」。そのように「神のへりくだり」は三位一体的であり、その何れの位格においても「人間の言語へのへりくだり」である。」「神のへりくだり」はどこまでも〈事実的〉であり〈言語的〉であり〈歴史的〉である。」(68)

「言語の人間性はそもそも神の「へりくだり」の意図であり、その起源は、神の働きが人間の本性に深く関わるそのところにあるとされる。ゆえに「言語の起源は神的にしてかつまた人間的なものである」。・・・言語を本質論的に捉え、その存立のキリスト論的なあり方を強調している。「すべては神的である。だが、神的なものはすべて、また人間的である。」(138)

「創造の記述は、神の自己啓示であり、人間の言語へのへりくだる神の愛の業とされる。実存変革に伴う世界把握の革新において、ハーマンは、自然をそのような創造の謙卑を語り出す歴史(出来事)的現実として認識したのである。」「自然が〈書物〉であると述べる。自然はそれ自体のために存在するのではなく、読みとられるべきテキストとして、そのようなへりくだりの伝達に関わる〈言語的〉なあり方をしていると言うのである。」(158)

「自然とは、書物であり、手紙であり、(哲学的理解における)寓話であります。」(163)

(6) 適応の原理から適応主義へ

21. イエズス会の宣教方針

高橋勝幸「A・ヴァリニャーノの適応主義の現代的意義」

(『アジア・キリスト教・多元性』第14号、2016年、133-147頁)

「2、ヴァリニャーノの適応主義

ヴァリニャーノはイタリアに生れ、後期ルネサンスの中心都市北イタリアのヴェネツィア領のパドヴァ大学で法学を学んだ。1566年イエズス会入会した後。総会長の名代として巡察師に任命され、1573年インドに派遣される。1579年巡察師として来日、初期日本教会を指導した。

今日の「宗教間対話」において、他者を心の底から尊重し受け入れることが前提になるが、「適応主義」(狭間芳樹「日本及び中国におけるイエズス会の布教方策～ヴァリニャーノの〈適応主義〉をめぐって」『アジア・キリスト教多元性』第3号、2005年、p.55～、及び拙稿「現代の宗教間対話に生きているA・ヴァリニャーノの「適応主義布教方針」～「根源的いのち」の霊性を求めて」『アジア・キリスト教多元性』第10号、2012年、p.37～、参照)はその根本を捉えている方針であった。ヴァリニャーノはザビエルの目指したものを踏襲するが、その根本精神はイグナチオの「霊操」における「霊動弁別」にあった。

・・・

①キリシタン時代の日本

・・・宣教師は、宣教国の文化、生活・習慣、言語を尊重して、その国・民族の中に生きている良いものを取り入れて行く方針が所謂「適応主義」と言われるものである。

ヴァリニャーノの方針をよく理解した、イエズス会イルマン不干斎・ファビアン(1565～1621)の『妙貞問答』にも「なつうらの法＝自然法」が説明されているが、「神の法」は宣教以前からすべての「人の心」に刻まれたものであり、「神の意志」は真理そのもので、常に人の心に響いている。人間が人間である限りにおいて、無意識にも誰でも「大い

なる方(いのちの源泉)」を感じ取ることが出来る。そこには、古今東西の詩人・歌人の歌にもあるように、宗派を超えて、時代・社会を超えて、常に働いて居られる方がいる実感がある。その「神の意志」を「祈り(瞑想)」によって忠実に読み取り、尊重して行くことが「霊操」であり、「適応主義」の基となるものである。

②適応主義について

適応主義とは、布教地諸国民の人種、言語、民族、文化、社会、道徳、心理、宗教などの特異性を考慮し、人間性という共通の遺産を反映する各文化の健全で有効かつ優れた価値を認め、保存し、高めて利用するよう、出来る限り最大の理解を持って宣布することであり、ヴァリニャーノはザビエルの方針を継承して、適応主義を取っている。

ヴァリニャーノは、第一回巡察報告(会議録については、井出勝美『キリシタン思想史研究序説』ペリかん社、1995年に詳述)において「適応主義布教方針」を打ち出し、ローマの総会長C・アクアヴィヴァに同意を求めている(「1583年10月28日付、コチン発信、アクアヴィヴァ宛の手紙」『日本巡察記』平凡社、1973年、p.4)。

・・・」

22. 「適応主義」「適応の原理」。

神が世界へ、人間へ。

人間がほかの人間へ。

焦点としての、言語・書物。

<参考文献>

1. 武藤慎一『聖書解釈としての詩歌と修辞——シリア教父エフライムとギリシア教父クリュソストモス』教文館。
2. ルター『キリスト者の自由・聖書への序言』岩波文庫。
3. 金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書、『ルターの宗教思想』日本基督教団出版局。
4. A. E. マクグラス『宗教改革の思想』教文館、『科学と宗教』教文館。
5. 芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房。
6. 渡辺信夫『カルヴァンの『キリスト教綱要』を読む』新教出版社。
7. 伊東俊太郎『ガリレオ』講談社。
8. 伊藤和行『ガリレオ——望遠鏡が発見した宇宙』中公新書。
9. 川中子義勝『ハーマンの思想と生涯——十字架の愛言者[philologus crucis]』教文館。
10. 高橋勝幸「A・ヴァリニャーノの適応主義の現代的意義」(『アジア・キリスト教・多元性』第14号、2016年、133-147頁)。